

九、文楽座へ復帰

初代吉田栄三／談

鴻池幸武／記

〈出典：「吉田栄三自伝」相模書房、昭和13年11月〉

(前略)

その盆替りに、「堀川」が出た時、「河原」で、多為蔵さんの伝兵衛と、私の官左衛門との立廻りを、「一つ面白うやりまひよか」という事になって、伝兵衛が官左衛門の眉間<sup>みけ</sup>をポンと打って、その儘極めて居ると、官左衛門は斜め向きで、眉間から血を出します。それを見て伝兵衛は、トントントントと後へよろめき、後の柳の木迄行って、刀を振り上げると、黒幕を落してメリヤス（註六十七）のカカリになる、という段取でしたが、伝兵衛が腰を抜かして刀を振り上げたその恰好と云ったら、ほんとうに町人が度膽<sup>どきも</sup>をぬかした時の恰好で、お客様に大変喜んで頂きましたが、官左衛門の眉間から血を出したのは、これが最初でした。又、『堀川』で、多為蔵さんの伝兵衛は、母のクドキの間、「——二人は何と詞さへ」迄、如何にも自分の事を言われて居るという腹で、ジッと気を入れて遣って居られるのに感心しました。このような事は、よくわかって居ながら中々出来ないことです。

(後略)

[註] 六十七 その起原には数説あれど、ここでは、舞台の蔭で伴奏する三味線の曲を指して言う。